

Profile

山村浩二さん

1964年生まれ。東京造形大学卒業。2002年「頭山」がアヌシー、ザグレブなど世界の主要なアニメーション映画祭で6つのグランプリを受賞。第75回アカデミー賞®短編アニメーション部門にもノミネート。2013年九品仏にアニメーションストア&ギャラリー Au Praxinoscope を開設。絵本作家としても活躍。東京藝術大学教授



右／「頭山」の主人公は偏屈なおじさん。でもどこかに可愛げのあるキャラクターを創造するのが、山村さんのアニメーションの魅力
上／世界4大アニメーション映画祭すべてでグランプリを受賞した、代表作のひとつ「カフカ 田舎医者」



作期間だったので、最後は絵柄が
変わってしまい調整などもしました
が、作品を貫くこのテーマはブレ
ませんでした。

山村さんの創作活動を支えてこ
られたのは、大学時代からの長い
付き合いの奥さま。「基本的には一
人で創作をしているので、妻の客
観的な目線は必要不可欠です。心
構えが定まっていけないときなど、す
ぐに気づかれています。もちろん
ん、ぶつかることもあって、僕は喧
嘩すると黙り込んでしまうのです
が、妻は解決するための言葉を探
そうとしてくれます。僕の表現を
理解した上で意見をもらえるのは
ありがたいです。自分にとって『ピ
ノキオ』におけるコオロギのジミ
ニー・クリケット、つまり良心のよ
うな存在かもしれません。

柔らかな物言いです。丁寧な説明し
てくださる様子と、気長な作業
というイメージの仕事柄からは想
像できないのですが、自身の性格
を「実は短気ですつちかち」と。「ア
ニメーション作りは確かに長距離走
ですが、やっていることは瞬間、瞬
間の決断の積み重ねです。逆に気
の長い人は作業が進まないかもし

世田谷ゆかりの作品で アカデミー賞®ノミネート

れませんね。でもね、40歳くらい
からはせつちかちさも少し落ち着い
てきたんですよ(笑)」と穏やかに
自己分析。

常に自身を取り巻く世界を見つ
め、普遍的な問いを作品に込めて
きた山村さん。今後の創作活動に
ついて「今、関心を持っているテー
マは運命論です。未来に起こるこ
とは、あらかじめ決められているの
か、偶然なのか。それは修正可能
なのか。こういう大きなテーマを
表現するときに「映像」の力って
すごいなって思うんです。言語を持
つ前から人間は人間だったわけで、
その本質みたいなもの、特に内面
を表現する手段としてアニメーショ
ンには可能性があると思っています。
「これからどんな作品をみせて
くれるのか期待が膨らみます。」

おとなり(re)読者へのメッセージ
にも、ものづくりへの思いが溢れ
ます。「若い時も、年を取ってからも、

その時にしか表現できないことが
あると思います。年を取ったら取っ
たなりの華というものがあるはず。
僕も、今の自分を受け入れる形で
創作していきたい。でも年を重ねて
もとんがって、自分に対する違和
感みたいなものは持ち続けたいと
思っています。

インタビューを終えて

取材前に、山村さんの主な作品を見直したのですが、改めてその発想力、自由な表現方法に驚かされ、解放感すら感じました。世田谷にこんな素晴らしい芸術家がいらっしゃることに、そして、その方が実に気さくなお人柄であることを本当にありがたいと思いました。「頭山」はもちろん、他の作品もぜひ一度ご覧ください。(麦島)